

—ser—



[—GFR—](イヒツ)

今回もサイズ7エ千本です。

こんなFateがあってもいいんじゃないかなー
って思いながらかきました

おっまくても可愛ければいいのです (はあと

ー前書きー

初めましての方はじめまして

お久しぶりの方お久しぶり

そんなベタな前書きで始まります、ベタは偉大です

何とかFate本二冊目出す事が出来ました

ちょっと特殊な傾向が見られますが、暖かい目で見てください♪

ホント、暖かい目で見てくださいねwww





おはよう遠坂

今日もいい天気
だぞ

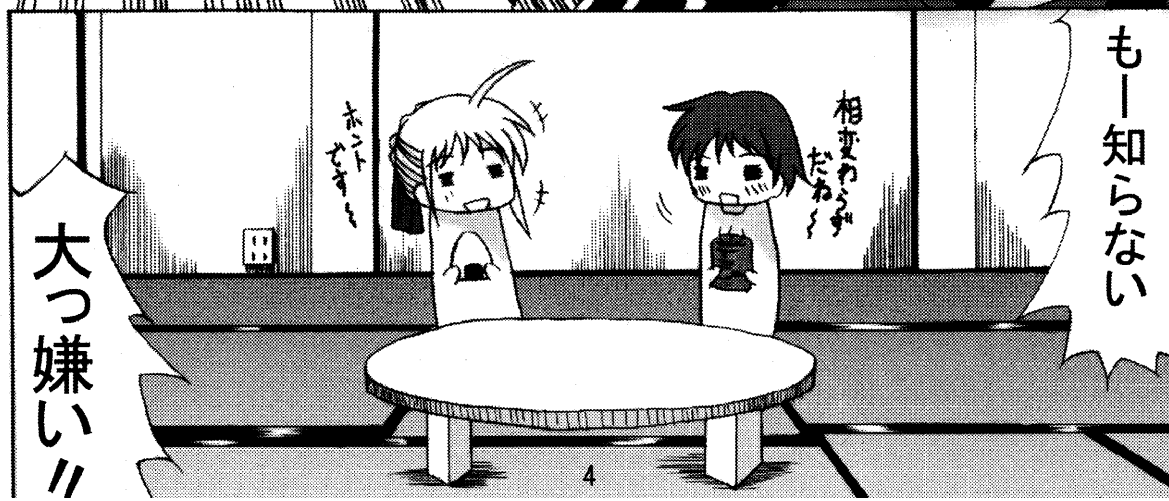
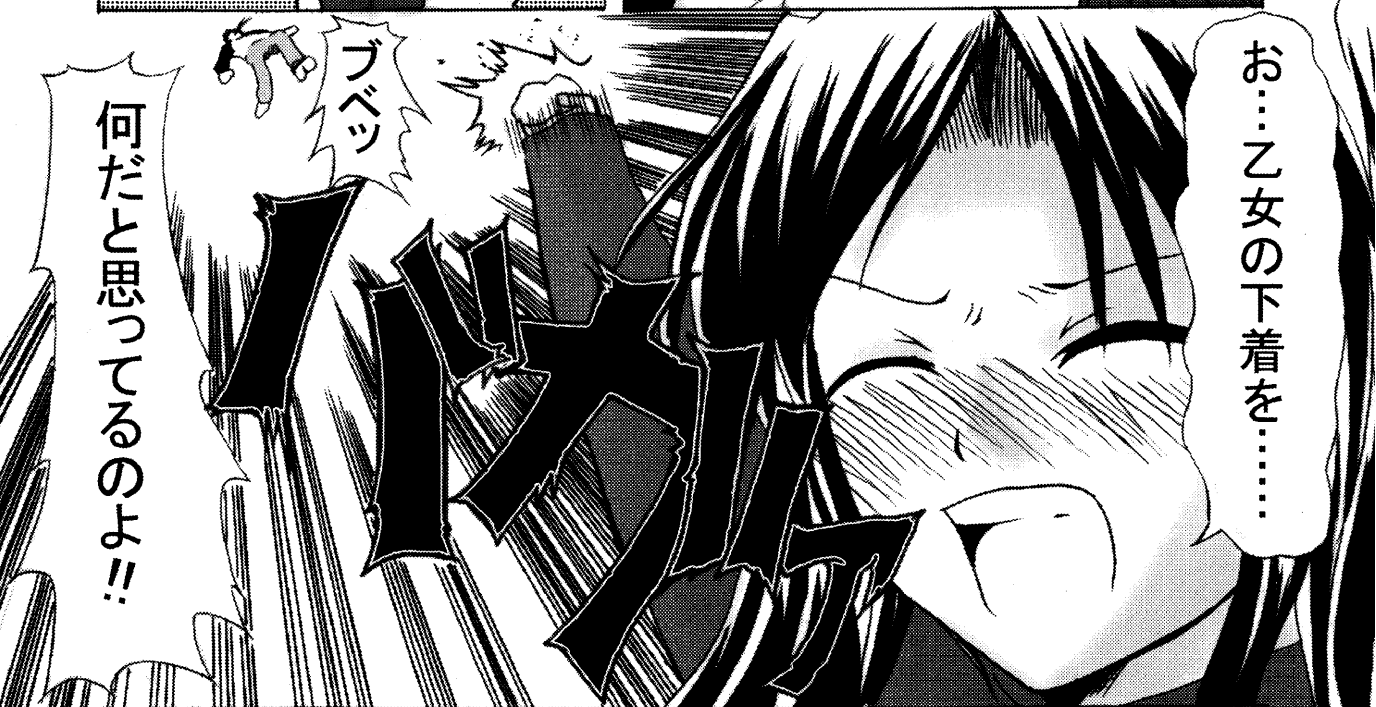
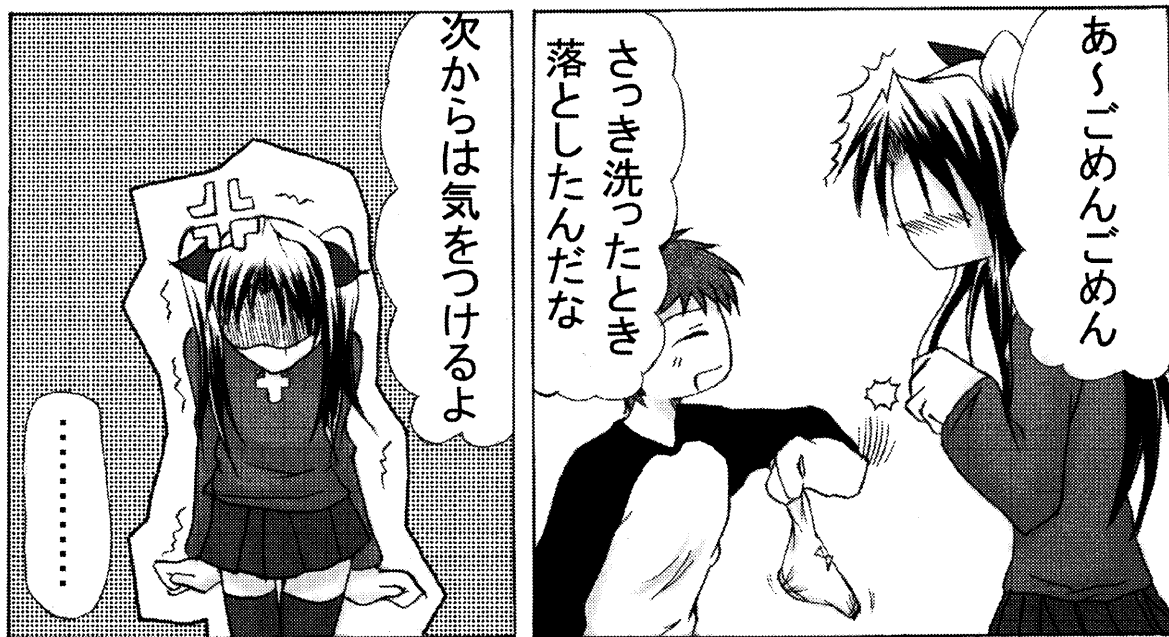


何で部屋の前に私の

下着が落ちてるのよ!



ちよつと衛宮君!!



もーホント信じられない

なんでこんな…

どうしたエラく
フキゲンだな凜

ズン

あゝ…なんだ
あんたか



ハハ
なやかわしい…

折角心配して
出てきたのに…

よっ余計な
お世話よ!!

なんだ…とはまたエラい
言われようだな…

最近上手くいって
ないのだろう? あやつと

ズン

そう…

とにかくあの時は
必死だった

ただただ
がむしやらだった

彼も同じだった

あの戦いが終わってから
衛宮君は変わった…

でも今は違う…

何をどうしたのか
私には分からない…

そんなあなたに
朗報です♪

ハアハア

相手が何を欲して
いるのか分からない…

それはエロスです

うおい!!

では私がそれを
お教えしよう♪

ホントだよ
間違いないよ

サーヴァント
ウソつかない…

イヤ、思いつきり
ウソだろ…

まあいいから使ってみ

まてや……

ホレ薬!!

あ、それ自分で飲む
タイプだから

シュタ!!

だあ――

別にこんなの
いらな……

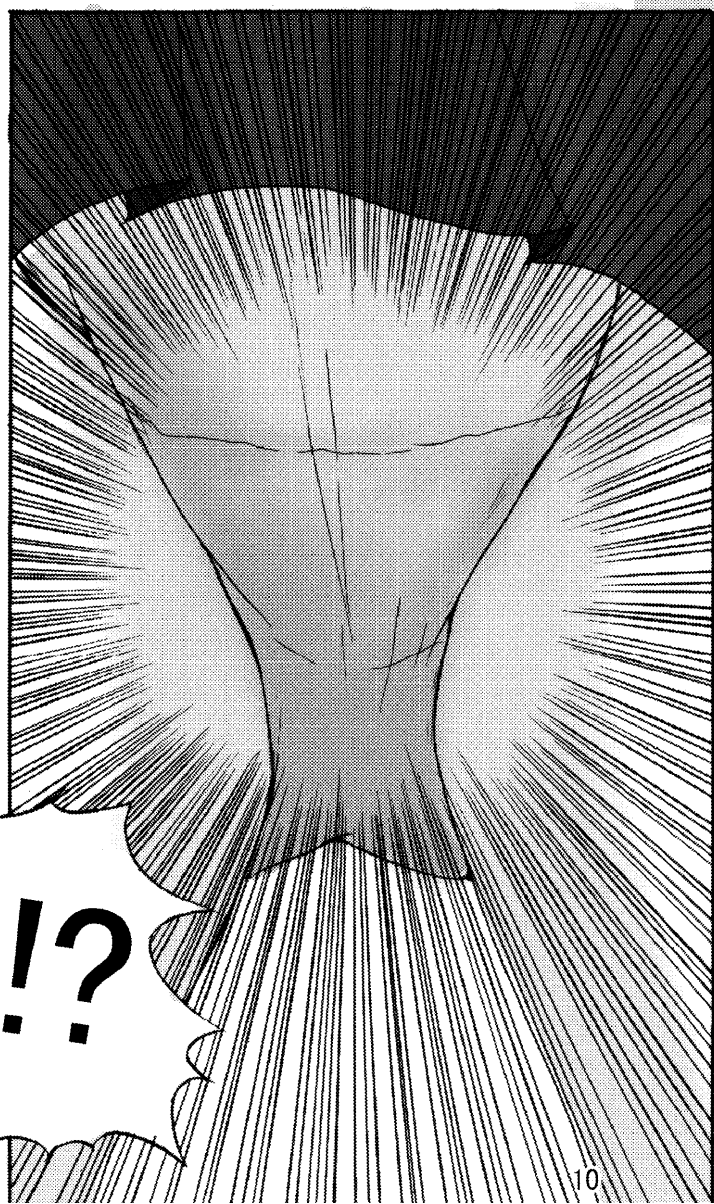
い……う……

……

ど……う……

コレ……







キヤー

!!



あわわわ...

シ・シロー
早く避難を...

もー何よ「うー」!!

ちよつと出てきなさいよー

アーチャ…

一体どうした
のだ凜?

ココ

POW

あんた一体
どうゆうつもりよ!!

コレのどこがホレ薬な訳!!

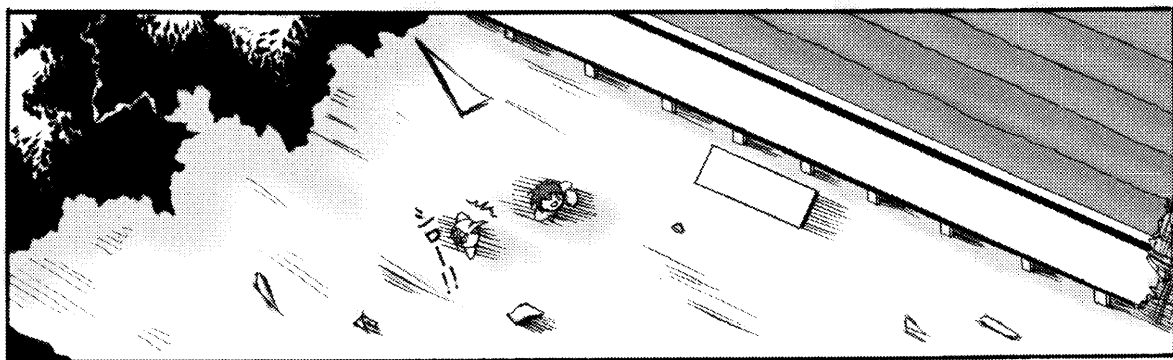
イヤ…間違いなく
ホレ薬なのだが…

それは好きな相手の
願望通りの姿になる
物なんだがな…

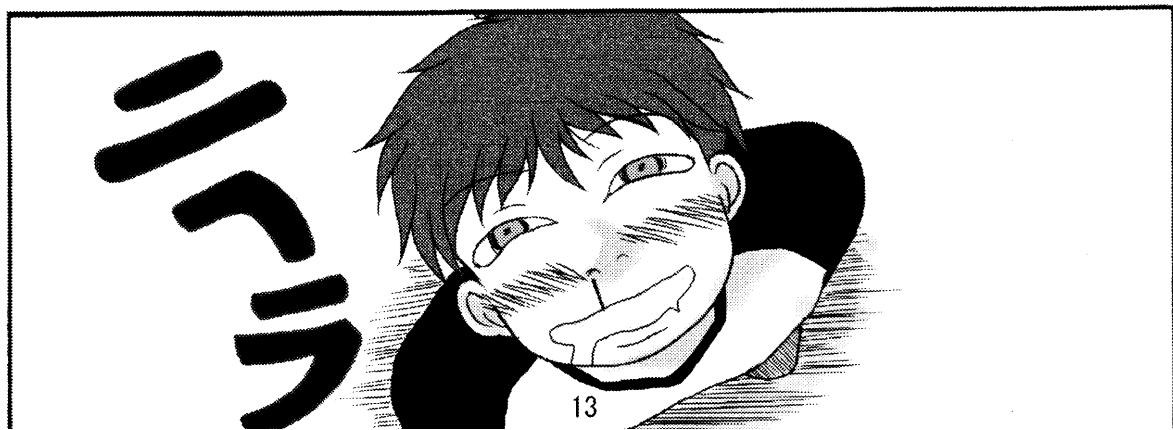
相手の願望

通りになる…？

ケラ…



「早く
避難を」



あんたのせいだ!!

タタ

プチ...

この...
変態!?

うわーん

元に戻してよ

~~~~~



イヤ...相手を潰して  
しまったらもう  
どうにもならんぞ...

えっ!?

タイガー道場

あ、もしもしスタッフ  
サービスですか?

バカー人引き取り  
お願いします♪



おどろおどろ





どこですかあ？  
昼食の時間  
ですよお？

シロー？  
シロー？



セイバ

シロー??



おっい  
ここだっセイバ



変ですね…確かに  
先ほどまでいたハズ…

おっい…

十分後。

さくで説明して  
もらいましょうか

シロー……

何故昼食の  
仕度をする前に

そんな姿に  
なってしまったの  
ですか!!

せめて昼食の  
用意してから……

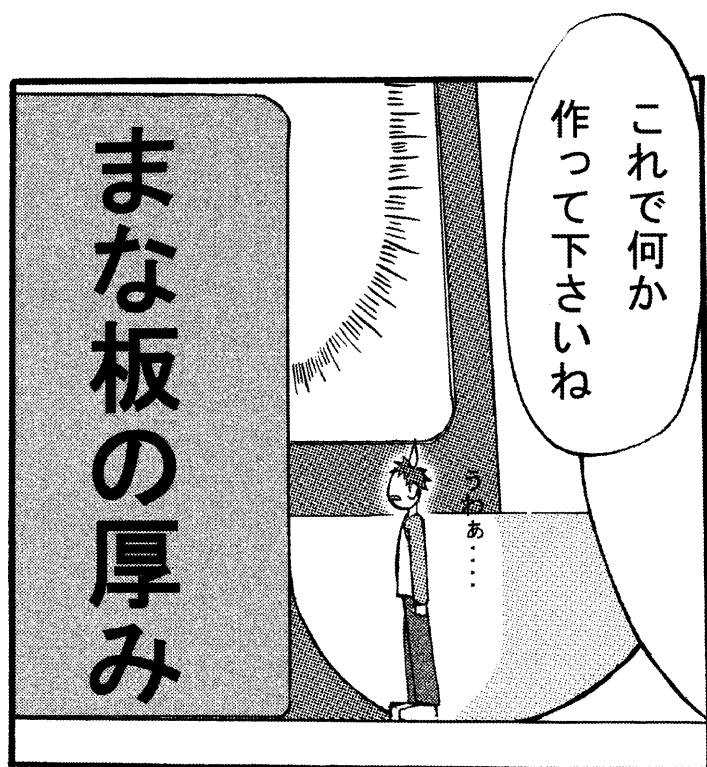
ヒデキ……

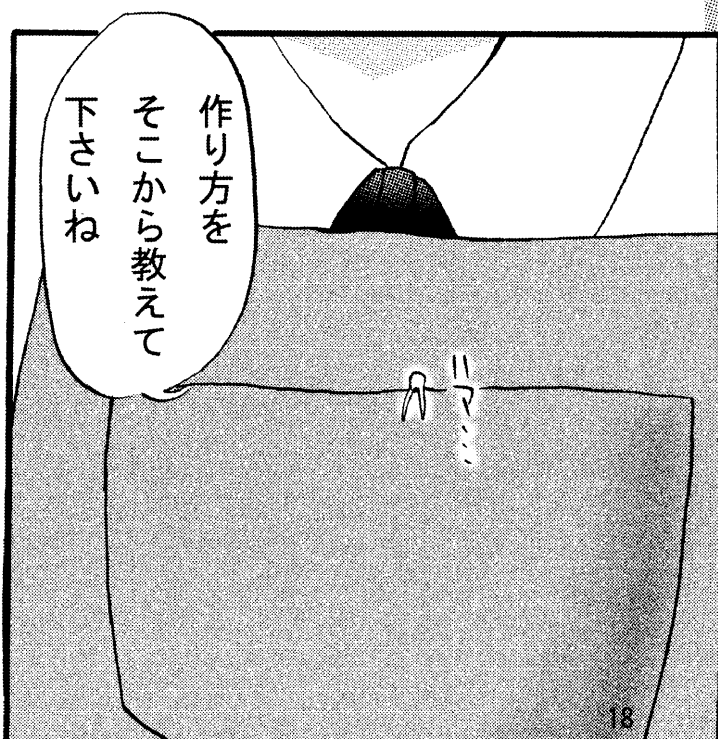
と・に・か・く!

シローには  
きっちり!

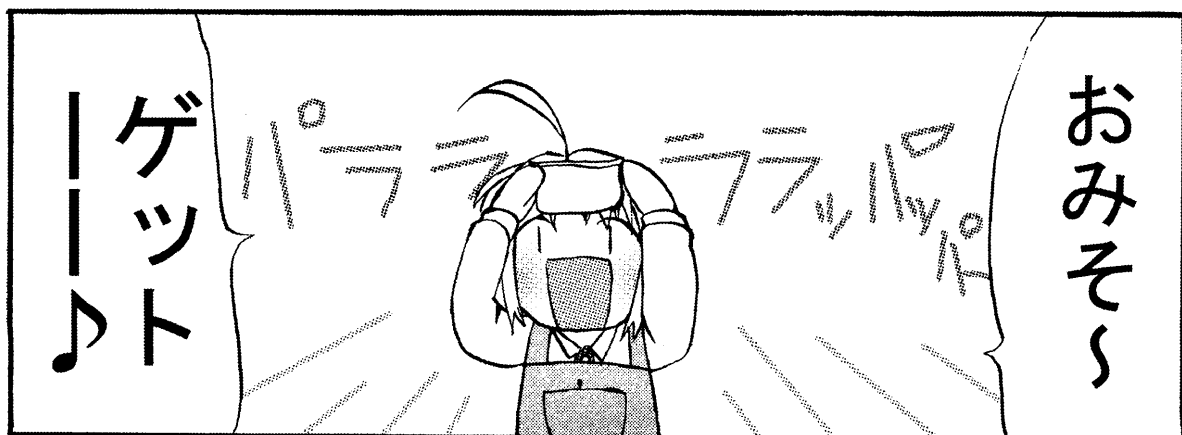
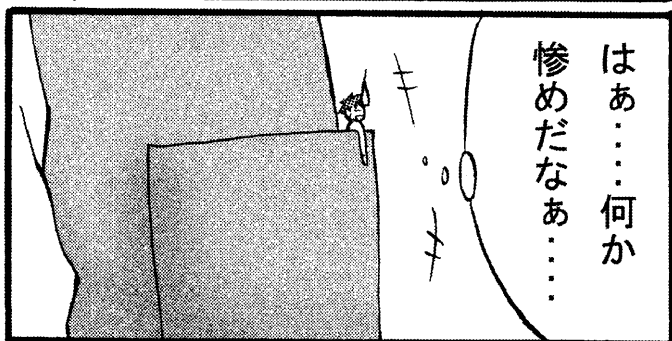
昼食の仕度を  
してもらいます!!

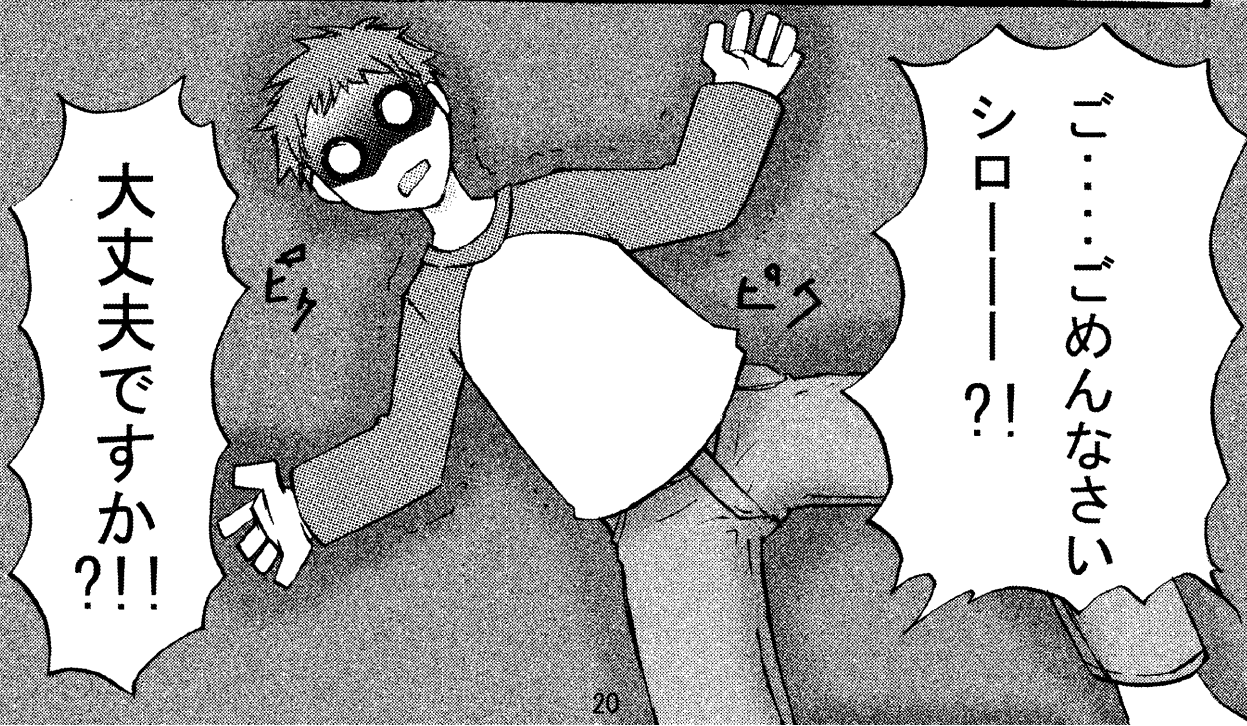
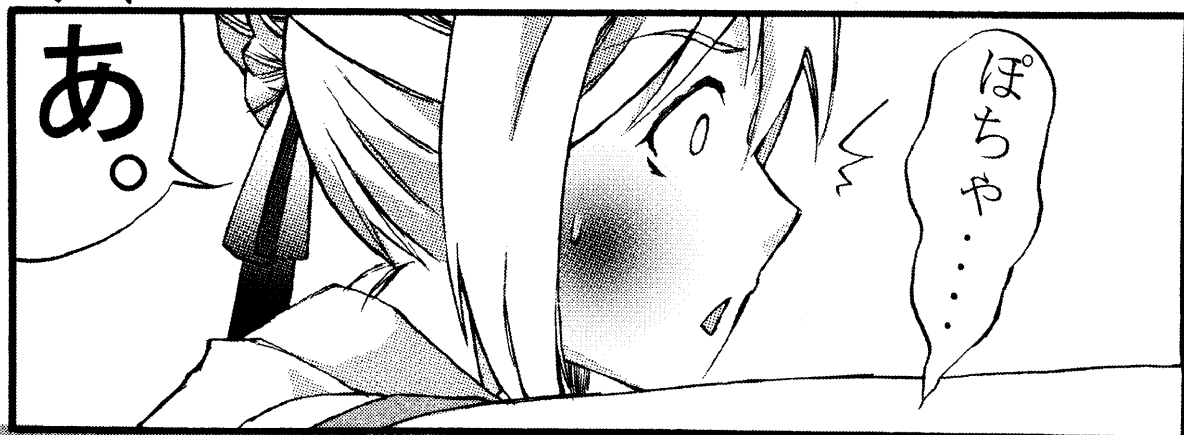
セイバーちゃん  
でかあね……



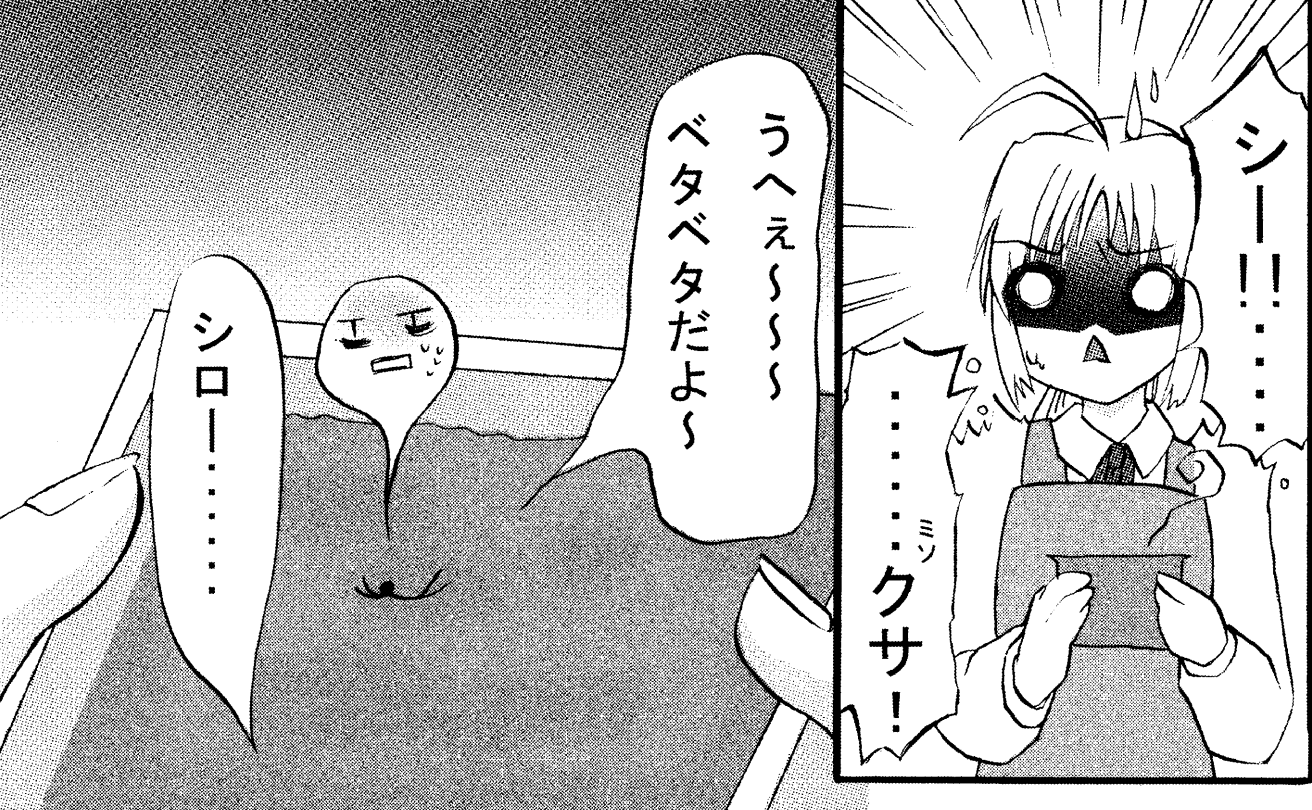












シー!!...

.....  
クサ!

うへえ~~~~  
ベタベタだよ

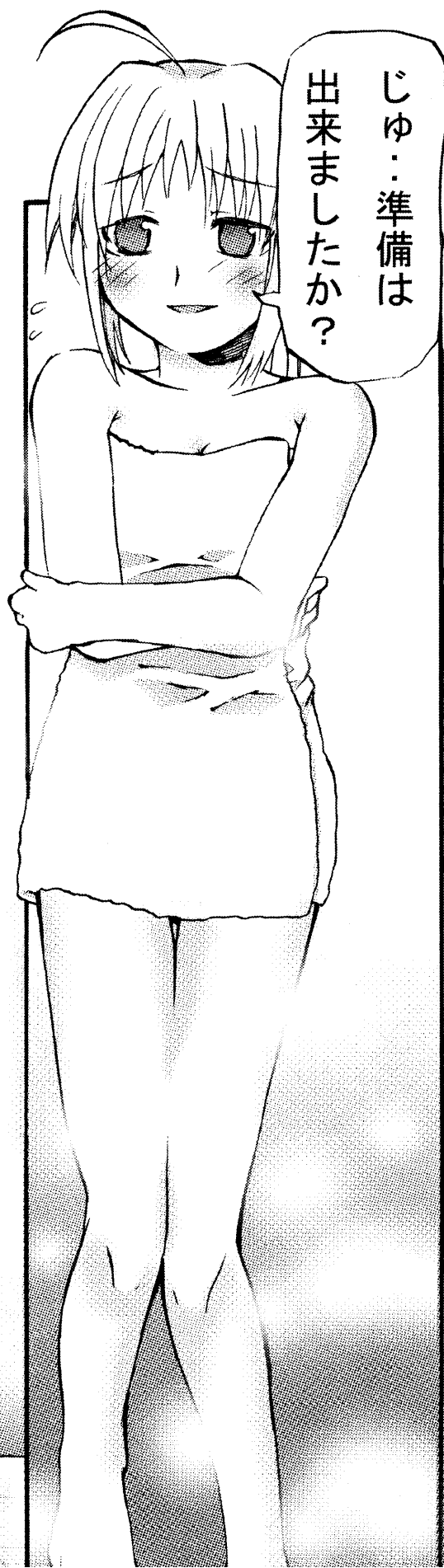
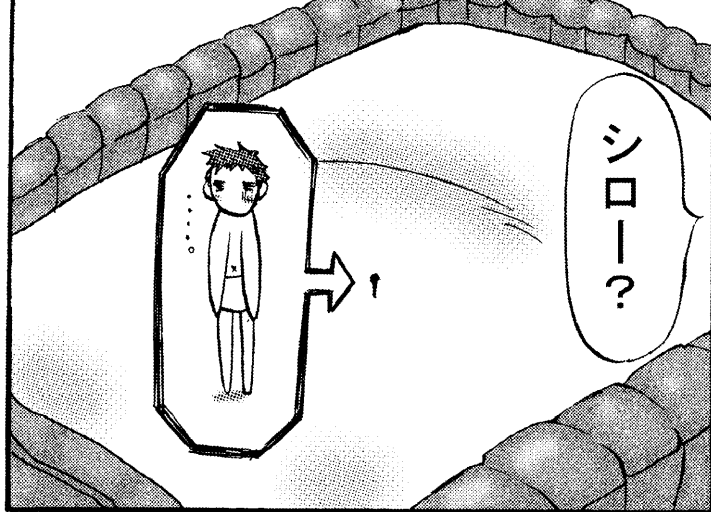
シロー.....

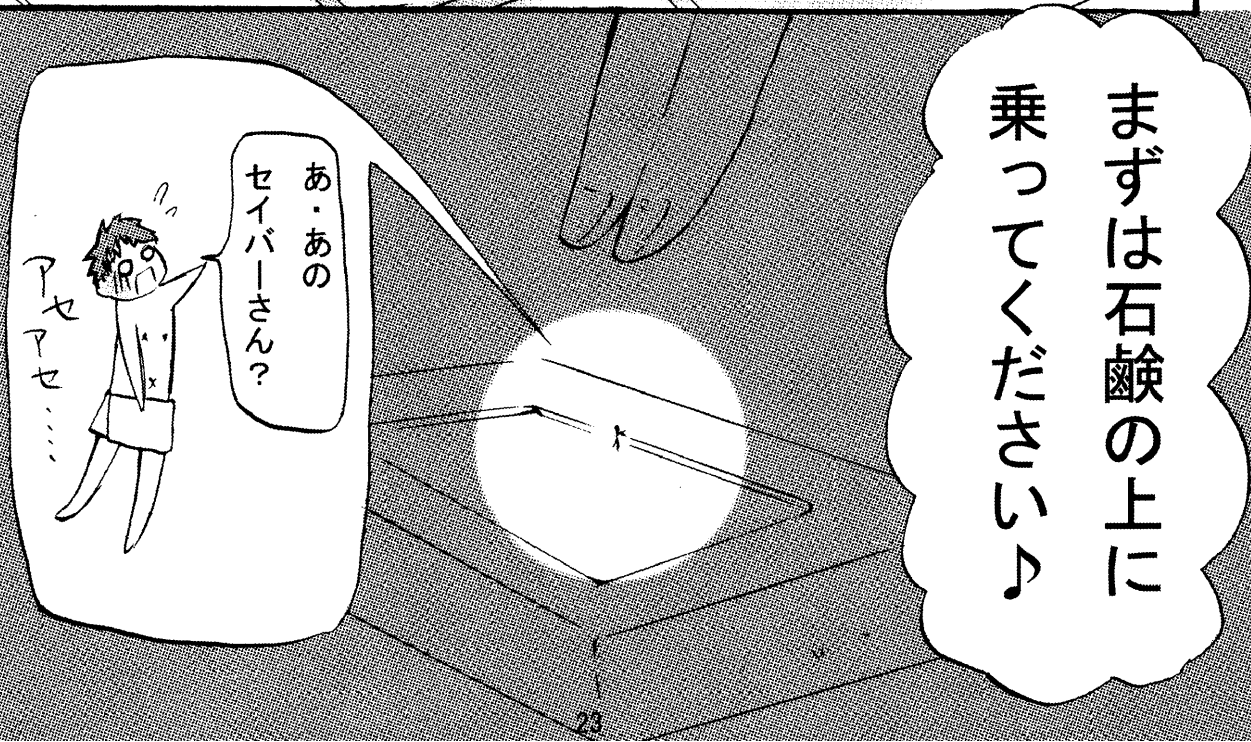
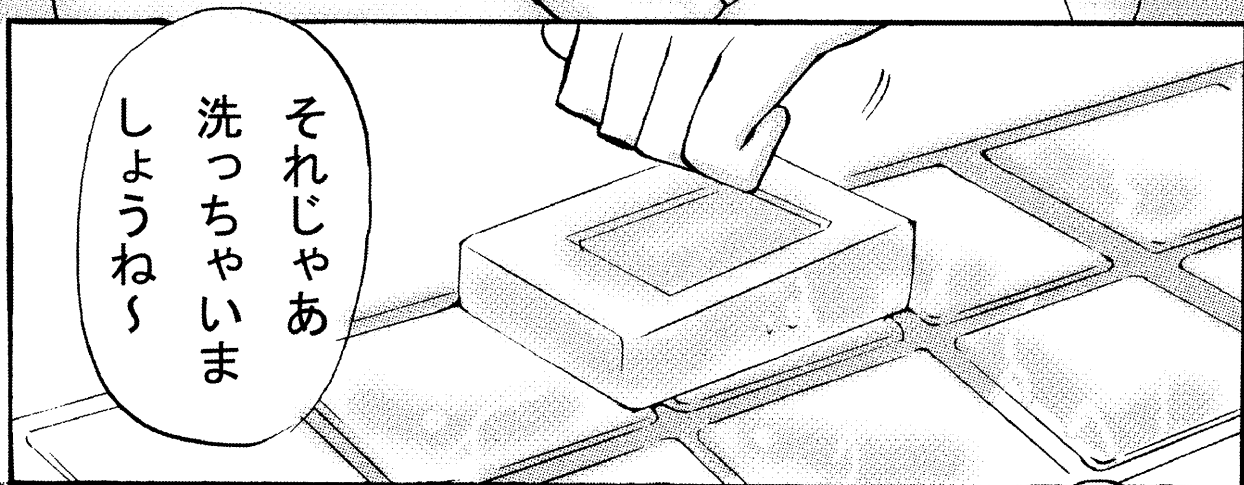


お風呂に  
入りましょう

一緒に.....

ハア?





この状況は  
さすがに……

恥ずかしいの  
ですが……

大丈夫です  
私も

恥ずかしい  
ですから

じゃあ  
ヤメテー!!

でもシローの  
為でしたら

私がんばります！

元々私のせいだし……

じゃあ  
動かないで  
下さいね♪

あ

シロー！！

ポ

チャ

ああ〜！

か

またこんな  
オチ……

か

か

か





わあ!!

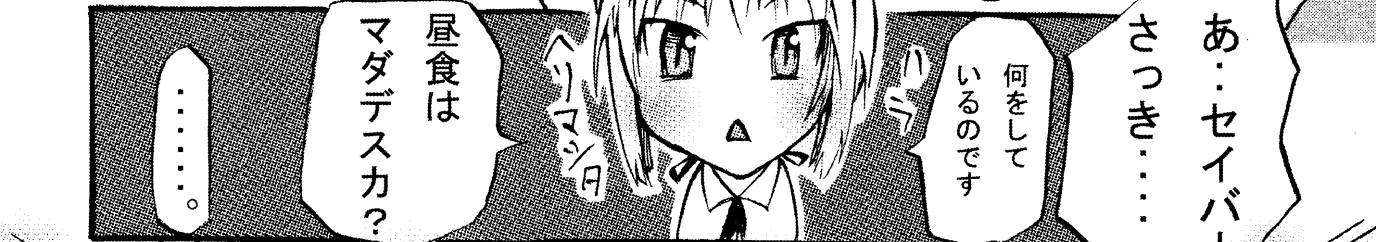


夢!?

元に戻ってる...

いや...違うよな...  
妙に現実味があるし...

シロー



あ:セイバー  
さつき...

何をして  
いるのです

←マシロ

昼食は  
マダデスカ?

.....



自分で...

作れ

!!!



## FF —不二子Fフエイト—

書いた・ルーパー

——ライダーの視点——

「……アンガウル？」

踝まで届きそうな髪が風になびいていた。色は透き通るような紫。

ライダーは混乱していた。なにが分からないのかも分からない。

ターゲットの黒シャツにジーンズ。素っ気ない服装。しかし、そっけない布地は服に寄る皺と張りを目立たせる。身体の曲線を際立たせていた。

ライダーはまばたき。まばたき。

目を開く度に、周りの世界が小さくなっていく。

天井は貫いた。

目線と同じ高さに屋根。一度のまばたきで胸の高さに屋根。二度目のまばたきで腰、三度目で股下の高さに屋根。

あつという間に踏み台の高さに屋根。低くなるだけでなく小さくもなっているため、手のひらに乗りそうな大きさに見える。

素足だった。裸足で土を踏みつける感覚が——ぬかるみゲルじみた土が、隙間を見つけるように指の間によじるように割り込んでくるのがぬるくすべつたい。

「んっ……あ」

声が漏れる。

庭が見える。半畳にも満たないように見える。

生えている木は盆栽サイズ。さつきまで枝より太かった指は、もう幹より太い。

足元。つま先が、家の敷地からはみ出そうになりつつあった。

これはまずいと、ライダーが足を一步動かしたので、隣家が踏み潰された。素足から加わる荷重に耐え切れず、家の骨組みが崩れ壁が割れていく。ついには地面と足裏にサンドイッチされた。

「……………えっ」と

おそおそる足をどけるライダー。足の型がとれていた。石のように硬く固まった地面。踏まれた家は、凹みの更に底へ厚みなく埋まっている。

「そんな、これは……」

足を戻す。窮屈そうに。

土踏まずに反対のかかとをかませる。せめて足と足をくっつけて、なるべく小さい面積の上に立とうとするライダー。

不安定な姿勢、揺れる上体。どうしようもなく、腕組みして前かがみになって可能な限り身を縮めるライダー。

ライダーの意思を無視するように、身体はさらに大きくなっていく。半紙に落ちた墨滴が広がる速さ。

「……止まらない。縮まない。」

「……」

じつと手を見る。

自分の身体は見慣れたサイズで、違和感を感じない。ただ、眼下が見慣れないサイズ。ただ立っているだけで、小さく、小さくなくなっていく。

——なぜこんなことになったのか。

どういう経緯があつて、地面に立っている自分がビルの屋上を見下ろしているのか

考えるうちにも身体は大きくなっていく。脚の長さに勝る建物が減っていく。たしか、シロウが——

「これは本当にどうなっているのですかシロウ？ シロウ！」

第一容疑者は見当たらなかった。

——もしや踏み潰してしまったのだろうか。

青ざめるライダーの顔。

「シロウ？ どこですかシロウ？」

シロウを探し、視線を周囲に走らせるライダー。

体重移動に、足元の地面がひび割れめくりあがる。ライダーの両足はわずかに——メートル単位で沈みこむ。

士郎は見つからない。焦るライダー。

頭が真っ白に……視界、白いもやがかかる。雲だと気付いたときには、雲より高くに頭があつた。

世界中の人工物よりも高いところ——飛ばなければ到達できないような高さにもや、瞳があつた。

飛ばなければ。

この程度の高さならば天馬に乗って到達したことは幾度もある。しかし、いま自分の足は地面についている。空と地面の間を自分の身体が埋めていることが信じられない。

西の果てで天を支えたという巨神・アトラスのことをライダーは連想し——彼を石に変えたのはメデューサの首ではなかったかと考える。

考えるうちにも身体は大きくなっていく。腰の辺りが雲の高さまで達しようとしていた。

地図を踏みつけているような錯覚を覚えるライダー。足元でより小さくなっていく地図の縮尺。

裸足の足がひやりと冷たい。

地面に沈みつつある足。沈む深さより大きくなる高さの方が大きい。足の甲の高さは、地面から離れていく。

大きくなるに合わせて拡がっていく足に、街は引きずり込まれるように押し潰されていく。

しかし、ライダーには砂場で摺り足をする程度の感触しか伝わってこない。たまになにか小さいものが潰れるような感触が混じる。

風が吹いた。

ライダーの髪が宙になびく。その先端が市街地の端まで届いているのを——街の上空を覆い尽くしているのをライダーは見た。全市街の広さが、一部屋のようにしか感じられない。

すらりと伸びた指は短距離走じみた長さ。身長はさらにその十数倍。スケール違いの大きさに達していることを、鮮明に認識するライダー。

「や……いや……嫌……」

高い身長に劣等感を持っていたライダー。思わず肩をかき抱く。目をつぶる。

これ以上は大きくなるまいと身体を押さえつける体勢のまま、ライダーは大きくなっていく。

身体を押さえつける指一本にも、トラクター数十台分のエネルギーが費やされ続ける。

そんな現実から目をそむけ、ライダーは身を硬くして目をあけようとしな

い。足に伝わる砂場のような感覚は、さらに細かいもの踏みしめているようなもの

に変わってきていた。それから一分以上もライダーは目を閉じたまま動か

におそるおそる目を開いた。ゆっくり広がっていく視界。

巨大化は止まっていた。わずかな安心。

だが、見たくないものが目に入ってくる。更に小さくなった世界が目に入る。ライダーは、街に乗っていた。

身長一・七二メートル。

前にかがめば数百メートル先を真上から見下ろすことができる。

掴んでいた肩幅は四百メートルに近い。

中途半端な高さの山では、身を隠すついでにもならないような大きさ。ほとんどのビルがスポンの裾と背比べしなければならなかった。

服の皺さえ道幅より大きい。

大きすぎて、土踏まずの下にあるものを踏み潰さないで済むだろうと思わ

れた。

「こんな……ああ」身長コンプレックスからくる目まい。じくじく痛むトラウマ。世界が渦まき歪

んで見え——

ライダーは額を押さえ——るだけならよかったのだが、気を失ってしまった。身体が、ゆっくりと、傾いていく。



グワニッ

う...あ

ズズズ

片足で街の一面を占める大きさの身体が、雲より高い場所から加速しながら倒れこんでくる。

拡がついていく影が、街を津波のように覆っていく。

まず、足元から一キロ離れたところへ接地した。

千メートルの距離を加速しながら落下してきた身体に、ビルがまとめてプチプチと潰れていく。

身体に潰されなかったものには、高さ百メートルを超える衝撃波が襲い掛かる。

街全体が浮き上がったかのようなインパクトとともに、ライダーは街へ山脈のように横たわる。

#### ——四分二十五秒前——

「これは……………」

離れて一人頭を抱える衛宮士郎。

彼の得意は投影魔術。それは対象を物質化することができる魔術。

物質化にあたってイメージしたのは剣だったが、現われたものは違った。

「……………なにが悪かったんだ？ ……あれか」

まあ多分あれだった。

異次元に蓄えし無数の宝具を操る、伝説の二頭身。最も新しい伝説の一つにして青い狸。

昨日スベシャルがあつた。見た。視聴率は知らない。

それしきのことで投影中に雑念が混じってしまうとは——まだまだ修行が足りない、と、士郎は髪に手をつっこむ。

具現化されたもの——床に転がるものを見る。円筒形。剣の柄に似ていないが、むしろ懐中電灯のように見える。

青い狸がたまに出す、ナントカライトにそっくりだった。

何気なく、手に持つてみる。陽を浴びていた側面が温かい。

「……………いい天気だ」

猫がのんびり視界を横ぎり、視界の端では風に揺れるおきあがりこぼし。開けたままの入り口から見える庭は、春の陽射しの中穏やかな空気に包まれていた。

桜もすっかり見頃を迎えているだろう。

「桜といえば、今日は出かけてるんだったな」

夕方には戻るといつていた。いま家にいるのは士郎とライダー。

見るものの心を和ませる風景をぼんやり眺めつつ、深く考えず、ライトを外へ向けてみる士郎。

「そこにボタンがあれば押してみたくなるものだ」ハンバーガー」と、プレジデントもいつていた。

「じゃーすてぃーす」

何気なくボタンを押す士郎。ライト部分が輝く。庭が光に照らされる。

まさか本当に光が出るとは思わなかった士郎は驚いて、入り口からライダーが入ってきて光を浴びたのもっと驚いた。

「間もなく昼食が完成する見込みです。シロ……………ウ？」

ライダー、眼鏡の奥でまばたきまばたき。

「シロウ、ちよつと見ない間に、ひよつとして縮みました、か？」

ごん。

入り口に頭がつかえた。

光を浴びたライダーの身体が、頭身はそのままに大きくなつていく。

士郎は慌ててライトのスイッチを切る。止まる光線。止まらない巨大化。

頭が、天井へ向かって伸び——ごん。

足の付け根が士郎の首より高くにあつた。士郎はただ見上げるのみ。

具現化の限界を越え、青狸の宝具は薄れ消えていく。

#### ——衛宮・F・士郎の視点——

「ごん……………クツ、クツ……………」

ライトを浴びたライダーの身体が大きくなつていく。膝立ちなのに、頭が天



井につかえている。髪が床についている。天井を担ぐように手を伸ばしているのがいかにも窮屈そうだ。

なおも膨らんでいく身体——膝立ちから横座りへ——再び天井につく頭。大きくなっていく身体が、部屋の高さだけでなく横幅へも迫る。ますます部屋の空間が狭まっていく。

「シロウ……やはりこれは、貴方の仕業だつたりするのでしょうか？」

問い詰めながらもしきりに体勢を組みなおすライダー。その中でいつしかサングラスは脱げ、素足になっていた。

「いや……多分、そうだとは思っただけだ」

言葉が続かない。

小屋の軋む音が響きはじめた。

ライダーが大きくなるに合わせて軋む場所は増え、鳴る間隔は早くなっていく。

ライダーは可能な限り猫背になつていく。もうほとんど四つん這いに近い。が、すでにそれでも余裕がない。

「それなら早く、元に……」

台詞の途中で、ライダーの頭は天井を突き抜けた。

「戻し……」

開き直ったのか混乱しているのか、ライダーは立ち上がる。

膝は天井に達している。難なく士郎をまたぐだろう——家さえまたげそうなの足の長さ

士郎としても元に戻せるものならすぐに戻したいが、なにぶん方法が分からない。

なにもできない時間が過ぎる。天井を破った身長の数倍かくまで大きくなっていくライダー。

「……ウワ」

幅と高さを同時に増しながら、ライダーのつま先が士郎に迫ってくる。

さつきまでライダーが身を納めていた空間なのに、いまは片足でも窮屈そう。

迫ってくる足。離れ奥に陣取っていた士郎に逃げ場はなく、身を守るためライダーの足へ登る。

女性の素足によじ登る。

体を持ち上げるとき、爪が引つかかて痛かった。薄く肉がついた滑らかな肌の上に立つ。士郎の体まわりより太い足首が奥に見えた。

ライダーのつま先は、奥の壁を突き破る。

足の上、士郎はライダーを見上げた。

眺めるのにも苦勞するほどの大きさ。実際眺めると胸が邪魔で顔が見えない。

「んっ……あ」

声を抑え呻くライダー。

衛宮家の敷地は、ライダーの足に占められようとしていた。

「……えっと」

上からライダーの声。

士郎を乗せていない側の足が、まるで重さを感じさせずふわりと浮き上がる——乱れる気流。体勢を崩す士郎。足は、そのまま隣家の上へのしかかった。

紙と割り箸でできているかのように、あっさり蹂躪されるお隣。地面と裸足の間で家屋が崩れていく簾た音が低く響く。

振動。おろされた足は地面に着いていた。

慌てるように足がどけられる。踏まれていた場所には、足裏の起伏もはつきりと跡が残っている。

「そんな、これは……」

フキダシに汗をかいてそうなライダーの声。

いまやライダーの指一本の方が人間よりよっぽど大きいだろう。士郎の乗っている足も、重みで地面に沈みはじめていた。沈んだまま大きくなっていく足は、ブルドーザーのように土を押し上げ盛り上げる。

士郎の視線は、いつの間にか二階より高い。

ついさつき隣家に作られたライダーの足跡も、いまのライダーの足と比べるならばドレックスと兎の足跡を並べて見せたような見た目しかない。

士郎の頭上——はためくズボンの裾と足首の隙間は、トンネルのように広がった。

さらに大きくなっていくライダーの足が、街を押し潰し破壊し蹂躪していく。

邪魔なものを空気のようには押しながら、大きくなっていくライダーの足。

さっきまでは土を盛り上げ家を押しのけという様子だったが、いまや盛り上げられた地面の上に家や車が見える。土台ごとめくられているのだ。ライダーの身体が急速に大きくなっていくので、足の上にいる士郎は、動いてないのに離れた場所へ身体が流されていく。

ライダーの足の甲で士郎が占める面積が加速度的に縮んでいく——二倍になると四分の一。

ライダーが大きくなっているのではなく、自分が小さくなっていくような錯覚を士郎は覚えた。

足に乗った目線の高さが電柱を越えた。

足元でこれならライダーの目線はどの高さまで達しているのだろうと考えただけで、士郎は平衡感覚を失いそうになる。

足の指の谷間がどれだけ深いのか、想像もつかない。埋もれてしまったらそのまま戻って来れないかもしれない。

「これは本当にどうなっているのですかシロウ？ シロウ！」

空から、ライダーの声が降ってくる。

「ここにライダー。足の上——」

声を張り上げ、手を振って存在をアピールする士郎。

「シロウ？ どこですかシロウ？」

存在に気付いてもらえないまま、虫のように足へはり付いている自分がひどく矮小な存在に思えてくる。

傾斜した足の甲。校庭のように広く、更地のようになにもない。

いかなる建造物よりも高くまでライダーの脚は伸びている。上半身が、更にそこから空へ伸びていることが信じられない。

風が吹いた。ライダーの身体はビクともしなかったが、髪が広がり舞い踊る。士郎から見る空が、薄紫に染まった。

摩擦を感じさせず、さらさらと舞う髪の毛。

風につけて宙を舞う髪は、海のような質量を風になびかせ波間のようにたゆたう。

紫のオーロラかとも思われる髪の毛の広がり。近くを飛ぶものがあれば、たとえジャンボジェットであろうとあつさりからめとることができらるだろうと思われた。

「や……いや……嫌……」

ライダーにとつてはかすかな眩きだったのかもしれない。しかし士郎の身体はビリビリ震える。

士郎の視界——足の甲が、ビルより高い場所へせりあがっていく……地平線が。

風が止むころには、ライダーの巨大化は収まっていた。

足の指の間にビルさえはさめそうな気がする。

いまライダーが指の一本を動かすならば、それはビルより大きな質量が動くことを意味していた。

またぐという認識なく、歩くだけで足は街中の建物より高く持ち上がるだろう。

「こんな……ああ」

ライダーの身体が斜めに傾ぎだした。気を失ったのだが、そんなことは士郎に分からない。

士郎にとつての地面が——ライダーが斜めになっていく。足の上といつてもそこは十階を越える高さ。

そこから士郎は投げ出された。

——衛宮・V・士郎の視点——  
ライダーはうつ伏せに寝ていた。



ライダーの身体が大きすぎて、対する街の起伏が目立っていないと士朗は思う。

士朗は空を飛んでいた。

頭の上で、黄色いプロペラが回転中。

「あ、危なかった」

とつさに投影したヘリトンボによって、士朗は難を逃れていた。

寝そべるライダー。ビル群が目葉の群れに見えるサイズの顔。

テールクロスのように街へ広がる髪。こぶし大の太さにして長さ一キロ超の髪が、絹織物のようにからみ合いながら横たわっている。

人間の背丈より高い眉の下、閉じられた目は幅数十メートルの横幅。

乱気流じみた呼吸に大気が掻きまわされる。吹き飛ぶ看板、空を飛ぶ車、横転する木。

力なく投げ出され丸められた手は、コンクリートとアスファルトの層を破り土の地面まで悠々と沈み達していた。

寝ているというのに、手を伸ばせば雲を掴めそうだった。手のひらは、区画を二山いくらで握れそうなほどに大きい。

腰から始まり足首まで続く柔らかな曲線は、山々の稜線に通じるものがある。

「ンッ……んん……」

わずかにライダーは伸びをする。ライダーの感覚では二センチ三センチ足を伸ばしたただだが、実際は二十メートル三十メートル動く足を街を蹴散らす。

二六〇メートルあるサイズの足、半分にも届かないビル。

地面をえぐりながら進む足に、街が潰されていく。地面にこすれる身体に建造物が根元から持っていられる。服の皺に車が、建物がひっつかかっただけで浮いていた。

たじろぐ士朗。えらいことになってしまったことを改めて認識。

「でも、こうしていても仕方ないか」

士朗はライダーの顔へ向けて飛び始めた。

ビルとビルの間を縫って飛ぶ。

縦横に張り巡らされたライダーの髪の毛の隙間を縫って飛んだ。――熱帯の奥、

繁茂した蔦の間を行くような、光の射す海底洞窟を泳いでいくような感覚。

自分の呼吸が妙に大きく響く。

包みこむように、髪の毛が漂ってくる。

……やはり進みづらい。士朗は高度をあげた。

航空写真で見えるような大きさに街が見える高さまで昇って、ようやく寝ているライダーの身体のもとを目に納めることができた。

士朗はいま、ライダーの膝近くにいる。飛び始めてから三百メートルは進んでいたはずだった。

見下ろすふくらはぎの丸みがドームのように大きい。

上に人間が乗っていたとしても、砂粒に見えればいいところだろう。

士朗は肩を使って呼吸をひとつ。続けてライダーの頭へ向かって飛んでいく。

膝から三百五十メートル進んで太もも。五百メートル進んで尻。六百メートル進んで腰――

なかなか到着しない。

ひび割れた地面。ヒビだらけの瓦礫。崩れた町並みに目をやる。ライダーとのサイズ比は人間とミニチュアにも見えず、怪獣とミニチュアにしか見えな

い。ライダーの胸まで達した士朗。うつ伏せのライダーの、地面に押しつけられている胸を見た。

いまや湖の容積より大きな体積を備えた塊が二つ、身体の重みで地面に押し付けられ変形している。柔らかさを見せつけるように、行き場のない厚みは横へみ出していた。

「……………」

そこについて、どうしても色々と考えてしまっ

下敷きになっている部分……包みこむようにのしかかってくる重さと体温。

巨大な弾力の下、ライダーの呼吸に合わせて上下する圧力。

そんなことを考えていたから、具現化の限界をヘリトンボが越え、消えつつ



あるのに気付かなかった。  
消えた。

飛び降り自殺するには十分すぎる高さから落ちていく土郎。哀れ地面へ激突し肉塊に――なる前に、ライダーの手が土郎を受け止めた。

「……シロウ？……なんで、そんなに、小さいのですか？」

うつすら開いた瞳。意識の覚醒に合わせ、ゆっくり開いていく。

何度もまばたきしながら、のそのそと身を起すライダー。横座り。頭が雲に突っ込んだ。

足の動きは街をなぎ払い、新しく身体に接した地面を陥没させ、起き上がる身体に引きずられた髪は有象無象を絡めとりながら地面を駆けた。が、身体を起こした衝撃でライダーの意識を覚醒を促す効果もなく行動を妨げることもなかった。

「たしか、私は――」

間。ライダーの中で、倒れるまでの出来事がぐるぐるん駆け巡っている。

「……シロウ？」

蛇。ライダーが、鬼気を発していた。瞳孔が縦に細い。

「は、はい？」

思わず直立不動になる土郎。

「事情を、説明してくれませんか？……場合によっては」

土郎を、影が覆う。ライダーは五指を折りたたみつつあった。手のひらの一点に――土郎に向かつて。

八十メートル級の大きさと質量を持つ指が五本揃って土郎を指している。いまにも降つてきそうな重圧感。

手のひらに乗っている土郎からは、ビル五棟が鎌首もたげて迫ってくるように見える。自分の指と同じ種類のものだと、どうしても思えない。

「いや、その、これはあ！えつとお！」

危機的状況の人間は思つてもいない力を発揮することがあるという。この時の土郎がそうだった。

無意識のうちにあるものを投影していた。投影されたものを見た土郎の脳裏に閃光。

「そ、そうだ。ライダー。これを使えば元に戻れる……はず」

土郎は電話ボックスの、ようなものを投影していた。受話器に向かつてもしも〇〇だったらと話しすと、話した通りの世界になるという青狸の道具だった。

これでライダーを元に戻せると土郎は思ったが、

「いけませんシロウ！」

ライダーが叫んだ。その音量に土郎の体は痺れ、地面に膝をつく。

「あッ……」

口を押さえるライダー。咳払い。声を抑えて話し出す。

「その宝具は、インフレーション理論に基づいてパラレルワールドへの移動若しくは創造を行なうものだと言っています。使用したとしても、こちらの世界はこちらの世界で続いていくことになる。なにか非常に不味い事が起こりかねません」

「詳しッ！」

土郎突っ込む。ライダースルー。

「こはやはり、小さくするライトを出すべきではないでしょうか」

それは土郎も考えた。しかし――

大きくするライトも小さくするライトも、土郎には見分けがつかない。

投影したとして、小さくするライトならいいだろう。しかし、大きくするライトだったらどうなるか。

千倍サイズのライダーが、さらに千倍……百万倍の大きさになった場合を考える。

身長千七百二十キロメートル。マリアナ海溝の底に立つてもベレストより高くなる。ふし。

今のライダーが一ミリちよつとにしか見えなくなる大きさ。

日本列島・長さだいたい三千キロ。本州の長さとはほぼ同じ背の高さで、肩幅は本州より大きい。

数歩で沖繩から北海道まで到達し、指の厚みが富士の高さを上回る。  
手のひらで軽く太平洋で小波を起せば、大津波は沿岸を飲み込み内陸  
を蹂躪し日本海へ達する。それさえ水たまりと同レベルの出来事。

周りのものを引きずり込みながら、数キロの深さまで沈んでいく身体――  
「あの、シロウ……？」

ライダーの声に士朗は我に返る。どうやら遠いところへ思考がいつてしまっ  
ていたようだ。

士郎を手に乗せるライダーの身長は二キロもない。よかつた。とてもよかつ  
た。

「私に使う前に、なにかで試して確認してから使えばいいのではないでしょ  
うか？」

士郎に電球。

淵に立ち、自分の作った足跡を見るライダー。身長は通常サイズに戻ってい  
る。

この、底までどのくらいの深さがあるのかも分からないクレーターに自分の  
片足が収まっていたとは信じられなかつた。

見回す。一面に広がる破壊。平らに押し固められた地面と瓦礫が延々と  
続く。原型を留めているものが見当たらない。それが自分の寝ていた跡だと  
は思えなかつた。

「反省しましたか？ シロウ？」

手のひらに声をかけるライダー。そこには点があつた。小さくするライトに  
よつて、身長一ミリ以下にまで縮められた士郎だつた。

ライダーを元に戻した後、ライトを奪われた。お仕置きだつた。息を吹き  
かけた。

吹きかけられた息に耐え切れず、ころころと転がっていく士郎。

「フツ、しばらくはそのままでもいいと思いますよ？ シロウ……」

手のひらに向けて、ライダーは笑みを浮かべた。

余談。

今回の投影に使われた工程。

創造理念：未来理念。

基本骨子：未来骨子。

構成材質：未来材質。


製作技術：未来技術。

憑依経験：未来経験。

蓄積年月：未来年月。


あと街は大きくするライトを浴びせた時間フロシキをかぶせたら元通りになつ  
た。すげえ。

おわる。




凜です

実は今とっても  
困ってます



新しい魔薬が  
出来たのは  
良いんだけど…



まさか…  
**こんな効果**  
があるなんて…

おーい遠坂く

なんだよコレ、  
どうなつてんだ？

早く戻してくれよう！

う、うるさい  
わね！

私だつて今  
考えてるのよ！

うわあ…

あれ…？

ー  
ン  
？



ご……ごめん……  
いや、でもさ……

このままじゃ  
オレ何もでき……

何だろコレ……

い……  
良いじゃないもう

衛宮君

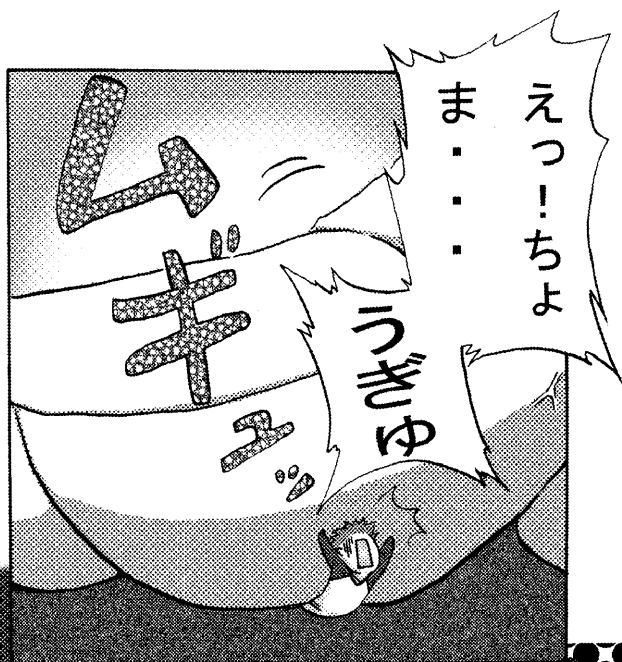
楽しい!?

なんて  
言うか……

お似合いよ……  
その格好……



言い訳しちやう



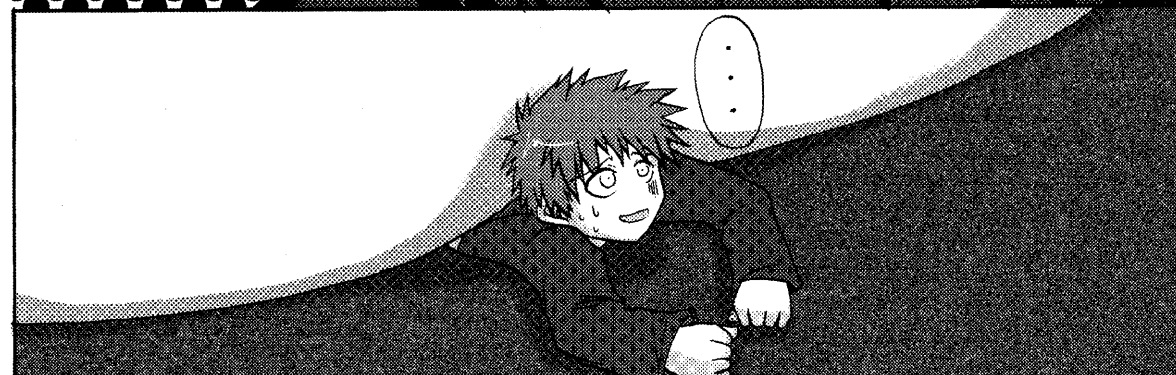
えっ!ちよ  
ま...

うぎゅ  
ギョ



だー...

め  
♪



...









巨大イリヤさんの  
一人遊びw

赤い悪魔

巨大凜降臨！

冬木市の明日は  
どつちだ！?w







一箱庭物語—

ふと気が付くと足元に

ノミのような人間達が集まっていた

「はて？ここはどこでしょう？」

足を少し横にずらす

人間達が一瞬の内に足の裏に飲み込まれた

「確か家庭用プールとか言う物で涼んでいたはずなのですが…」

左の脚を少し上げて下ろす、その踵は

ビル、人ともどもをあっというまに飲み込んだ



「あはは♪何コレおもしろ〜い♪」

突然の周りの変化にも動じずイリアは手近なビルを抜き取った

「うわ〜すご〜い♪ちっちゃな人もたくさんいる〜♪」

イリアの足下、密着したブルマの下で  
人々は右往左往していた

「エイツ！」

軽く伸ばされた脚が地盤を街を何の抵抗も無く  
えぐりとっていく…



三人が気ままにしていると、空が突然暗くなった

「どう？私の箱庭は？」

凜の声で三人は一瞬吹き飛ばされそうになる

街の人間達は瞬間的に虚空に舞い上げられる

そして再び息を吸った凜の口、鼻の中に

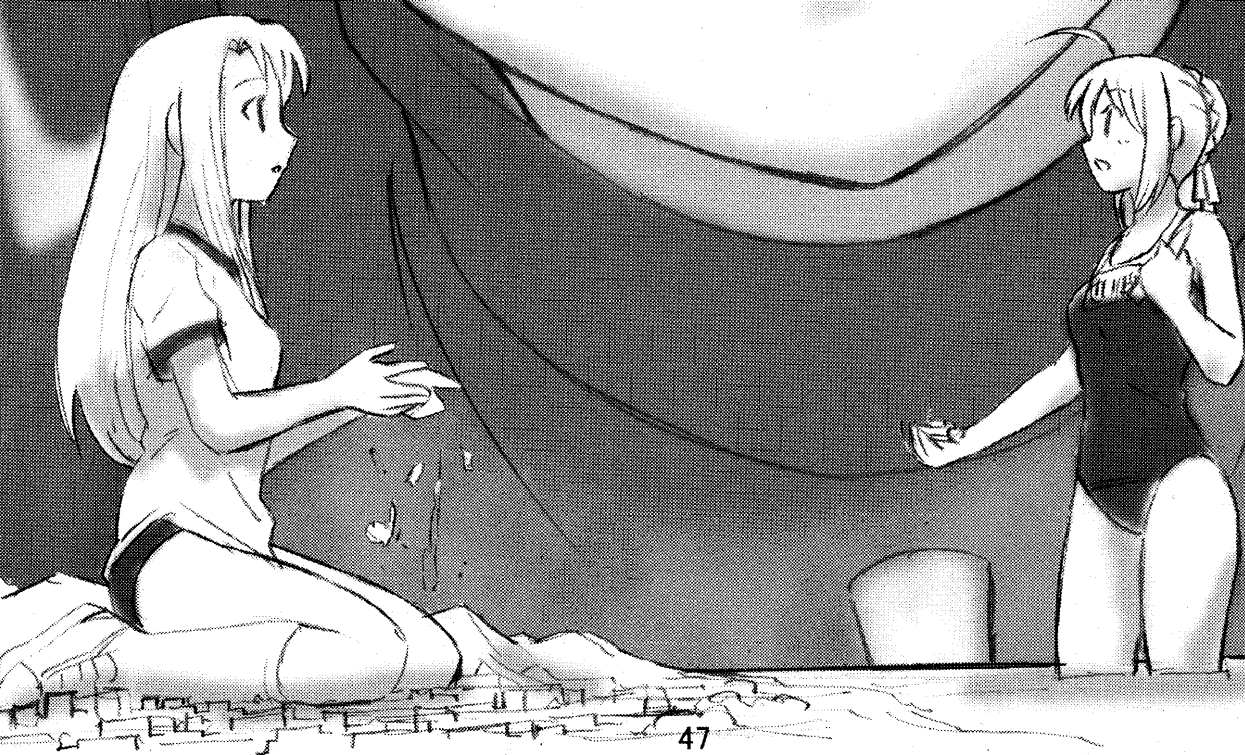
吸い込まれていった

「なるほどコレは凜の仕業だったのですね」

「すっごく楽しいよ〜♪」

「そう、それはよかった…フフ♪」

大気中にまた人が舞った。





ゴンッ！イタッ！！

突然魔法の効果が切れたのか

二人は元の大きさに戻った

「おかしいな一時間設定間違えたかしら…」

戻った拍子にぶつけた頭をなでながら

凜は二人の足下にある箱庭の都市を見る

セイバーの素足とイリアのシューズで中は

一瞬の内に壊滅してしまっていた

「申し訳ありません、凜」

セイバーの親指が残っていた都市を蹂躪した

「ごめんね〜♪」

イリアの爪先が人々が集まっていただろう

避難所をまとめて踏み潰す

「もういいわ、好きにして…」

「次の箱庭はもっと小さくしないとね…」

凜の計画はつづく…。

☆ 4

終

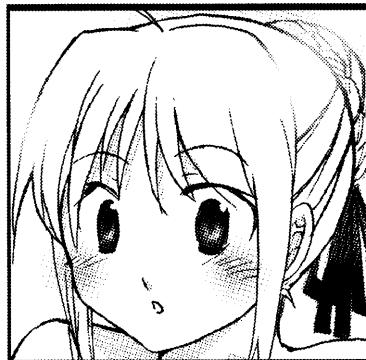


〜カーンコ〜



またまた主犯格を演じてしまいましたよ(ニヤニヤ  
なんだかんだでもう3冊目なんですね  
こうなりゃどこまで出せるかチキンレースだぜ！  
一応頑張って描きました、これからもよろしくです。

06/08/13 かてきん



コラボ原稿楽しかったよ。(●-ω-)ノシ  
バタバタした原稿でごめんね  
そしてありがとね。  
また家にエロ本みにいきます

五真

NO  
DATA

なの〜♪

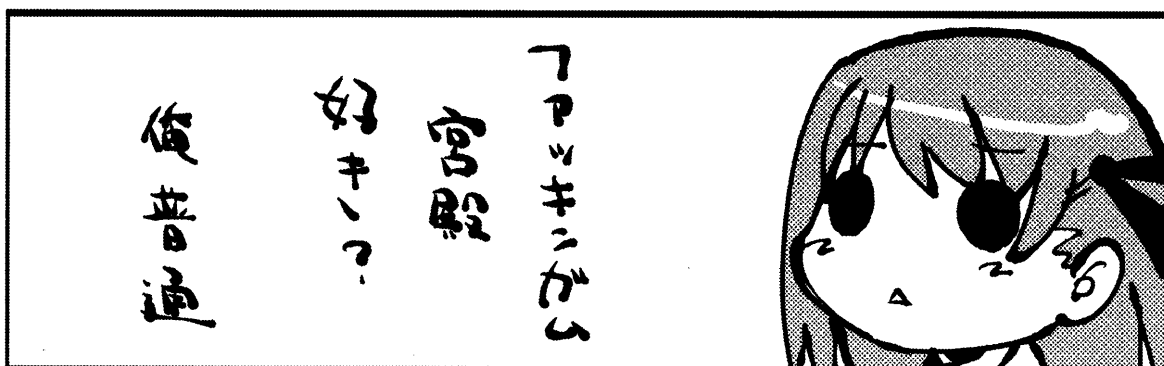
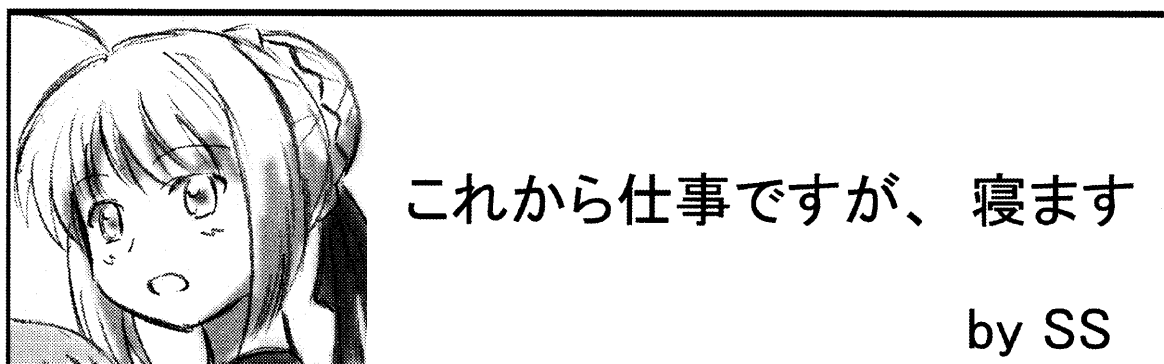
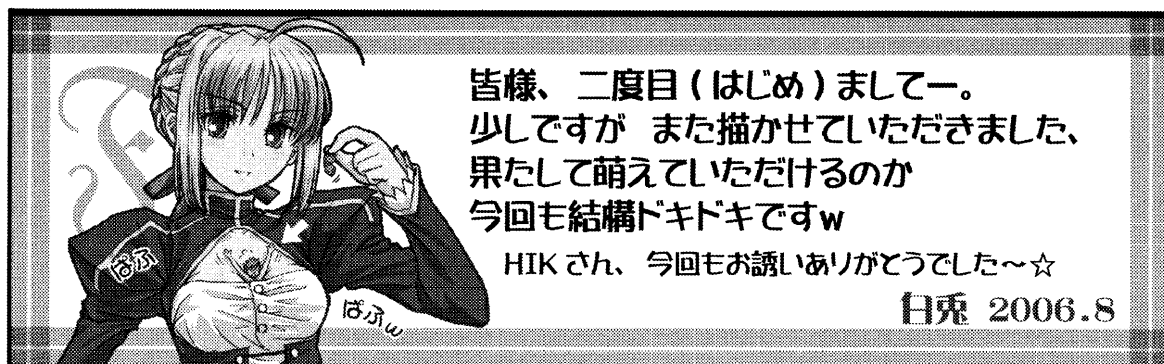
大長編では海底鬼岩城と鉄人兵団が好きです

ルーパー

はじめまして、シラヒラ晃介です。  
今回はゲスト描かせてもらいましたw  
いやあ、今回改めて  
自分の遅筆さを実感しました(汗)  
もっと精進しますね、先輩(笑)



# ～カーンコール？～



# あとがき

うわwwwあとがき欄せまっ！www

えっとこの度はお買い上げありがとうございます♪

しかしなんだ、こんなマイナーファチ本

良く読めますね（爆

コレを期に染まってしまうのも一興ですよ？w

あ、もう粹ないやwww

ではまたお会いする日まで…

H I K



# —GFR—

発行日

2006 年8月13日

subaru418@hotmail.com

無断転載・複製・アップロードを禁じます。

栄光印刷様







2006.8.13

HIK